

2022年度 ドコモ市民活動団体助成事業 活動成果報告書

2023/9/28

団体名	NPO法人 和太鼓教育研究所	活動タイトル	障がいを持つ児童への和太鼓・打楽器を積極的に用いた発達支援・療育プログラム「どんと鼓学舎」の開校と実践	
<p align="center">望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）</p>			<p>■活動風景</p>	
<p>●地域の望ましい社会状況(ビジョン)</p>	<p>私たち団体の実現したいビジョンは、障がいの有無に関係なく、互いの違いを認め合いながら、共に助け合い、学び合い、個々の特性を活かして誰もが自分の力を存分に発揮できる社会になっていくことです。 障がいを持つ子どもたちも、障がいをも一つの個性として、生き生きと自分の能力を十二分に高めていくこと、そして社会の中でかけがえのない大切な存在になっていくこと。そのために、まずは児童の段階での個性に適した、専門性のある発達支援サービスを身近に受けられる状況を様々な立場からつくっていくことが望まれていると考えております。</p>		<p>活動の風景①</p>	<p>体幹が弱い・体力不足・動作が不器用な障がい児にとって、大きな筋肉を使っている全身活動であるこのプログラムは非常に有意義であることに確信が持てた。保護者の希望する社会とのつながり、意欲的な行動・自信が持てることなどの取り組みの必要性を強く感じた。</p> 
<p>●団体の社会的役割(ミッション)</p>	<p>当団体は和太鼓という原始的な奥深い楽器を、子ども達の教育・保育目的に、全ての人々の健康で豊かな生活づくりのために、活用するための研究・実践機関として、日々活動を行っております。 私どものこの度のミッションは、活動の中で蓄積してきた和太鼓を使った専門性のある実践ノウハウを、障がいのある子どもたち向けに特化させた形で「発達支援・療育プログラム」をつくり、実践していくことです。和太鼓・打楽器音楽を使った専門的な取り組みを行うことにより、対象となる子どもたちが、障がいをも一つの個性としてのびやかに育っていくこと、自分の能力を十二分に高め、社会の中でかけがえのない存在になっていくようにしていくことです。</p>			
<p>●団体の活動基盤</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●人材育成：利用者の目的・ニーズに合わせた和太鼓指導ができる専門性を持つ人材を育成する。また、事業を企画立案し運営できる中核を担う人材も育成する。 ●物的資源：事業で使いたいときに使うことができる拠点防音会場を、まずは関西圏で1会場つくる。また事業で使用する楽器を必要量確保する。 ●活動資金：常勤スタッフの生活ができるための資金、会場費、広告宣伝費等の費用を確保し続けるため、自主事業でこれまで以上に収益を高めていく。 ●ナレッジ：音楽療育、和太鼓のプログラム等々、最新の研究、知見を日々得ていく。私たちのような事業を行うNPO法人運営に関わる、各種情報等を常時得るようにしていく。 			
<p>■活動報告</p>		<p>■1年間の目標に対する達成状況(まとめ)</p>		
<p>★障がいをもつ子どもたちへの和太鼓を使った療育プログラム →京都・大阪・兵庫の3県に渡り、5教室を開催することができ、療育プログラムに参加する子どもたちは、1回45分のレッスンを主体的に楽しみながら行い、繰り返して練習することで子どももしっかりと内容が身についた。</p> <p>★イベントへの出演 レッスンとは別の非日常の場所、不特定多数の前で練習してきた内容を披露することで達成感・自己肯定感の向上をどの子どもももつことができました。</p> <p>★障がいをもつ子どもをもつ保護者への支援 毎回のレッスンの際に子どもたちの様子を保護者と話し、今日の様子を指導者と共有する時間を設けると共に、毎回終わってから今日の様子をアンケート形式に記入してもらった。それにより継続して子どもの成長の様子がわかり、成果を感じるとともに、保護者との信頼関係の構築につながった。</p> <p>★活動基盤の強化 療育プログラムを指導するスタッフ、現場で子どもたちを支援するスタッフのいずれも、必要な人数を確保でき、毎回のレッスンが安定して開講することができた。開所した当初は、障がいの個性がバラバラで対応が難しかったが、「構造化」を進めることでスタッフの・支援スタッフの安定的な活動につながった。</p>		<p>ほぼ予定した計画通りに事業を実施することができた。年間の実績は以下ようになった。 年間の実績（アウトカム）は、以下の通りである。</p> <p>★障がいをもつ子どもたちへの和太鼓を使った療育プログラム 【定期プログラム開催回数】65回（達成度100%） 【参加人数】20名（達成度80%）</p> <p>★イベントへの出演 【開催回数】2回（達成度100%） 【参加人数】17名（達成度100%）</p> <p>★障がいをもつ子どもをもつ保護者への支援 【定期プログラム】参加者の60%がかなりの回数で子どもの成長を発見できた。 【イベントへの出演】参加者の60%がかなりの回数で子どもの成長を感じ、達成感を味わった。</p> <p>★活動基盤の強化 【スタッフ研修】50回以上（達成度100%） 【スタッフ増員】指導者1名増員 支援者1名増員</p>		
<p>★事業を通して得られたノウハウ</p>		<p>■望ましい社会状況を達成するための課題</p>		<p>■活動成果のアピールポイント（自由記入）</p>
<p>★障がいをもつ子どもたちへの和太鼓を使った療育プログラム 2年間の間にプログラムの体制や活動のスタイルが整い、より効果的に、より深く子どもの指導を余裕をもって実施できるようになった。個性がまちまちな子どもや保護者に対しても公平な同質の内容を提供できるようになった。</p> <p>★障がいをもつ子どもたちをもつ保護者への支援 レッスン会場と直接対面して具体的な悩みの伝え方や、毎回のレッスン後のアンケート記入を通して、保護者と連携して子どもの育ちを見守る体制ができてきた。家庭に帰っての親子での会話が増えたり、家庭で太鼓の練習をする機会が増えるなど、参加者と保護者のモチベーションを高めることができた。</p> <p>★活動基盤の強化</p>		<p>人は、自分以外の人と何らかの関係を構築し、共同しながら生きていくことが求められます。人との関わりの中で自分の役割や求められるものを感じ、それが生きる力になっていく。しかし、障がいを持つ子どもたちにとって、「共同」「協同」の喜びを感じる経験はハードルの高いものになっている現実がある。学校以外での生活の場はほぼ家庭であり、保護者の就労状態、経済状態に大きく影響される。障がいの種類によってはパニック型の問題行動が出る子どもの保護者は特に、世の中との関わりに対して消極的である。</p> <p>パニック型の問題行動も、年齢が増してくると次第に落ち着きが出て社会参加もしやすくなっていく。和太鼓教育研究所が始めた「どんと鼓学舎」は、和太鼓を他者と一緒につづけるという、人と人の共同作業を目的としている。ただ、音が鳴る和太鼓は、子どもたちにとって興味深く、動作も平易であるため障がいをもつ子どもたちにはうってつけの楽器である。みんなで一緒につくるといふ課題も入れながら個人の表現が発揮できる場面を用意すれば、一人一人の満足感と共同作業の両方が可能になるといふ「どんと鼓学舎」独自のプログラムは、おそらくもっと多くの障がいをもつ子どもたちとイベントなどを通して可能だと考える。例えば、そういうイベントを支える予算を国や自治体が保障してくれるような制度があれば取り組みやすくなる。目標は障がいをもつ子どもと、すべての子どもが、個人の表現と共同での表現が合同で可能になるイベントを、インクルーシブ＝それぞれの社会的役割共存した関係で実現できたらと考える。</p>		<p>この1年間の活動を通じて</p> <p>①子どもたちの体力・自己肯定感の向上、 ②保護者との信頼関係の中での実施、 ③組織基盤と活動の安定化</p> <p>を達成しました。</p>
<p>人員の増加（複数体制の強化）により、安心・安定した活動ができる。また、実際の現場の様子を事例にした研修で、支援者も含めて指導にあたるスタッフの力量向上につながる。</p>		<p>■受益者の具体的な変化（自由記入）</p> <p>プログラムに関わる前と比べて言葉だけの支持が入るようになったこと、落ち着きが出て座って待つことができるようになった。初めての場所や初めて経験すること、注目を浴びることなどに抵抗が少なくなってきた。太鼓の話を家でする子が増えた。家庭での発語が増えている。</p>		